

時をネットワークする

川床 靖子

Networking the times: Activity of re-networking the present through networking the past

Yasuko Kawatoko

はじめに

「松阪縞もめん」は三重県松阪市に伝わる木綿織物である。その発祥の歴史は古く、今から 400 年以上前に遡るが、19 世紀の半ばから 20 世紀の半ばまでのおよそ 100 年間は歴史の中に埋もれていた。しかし、この 35,6 年余りの間に、松阪縞木綿をめぐる幾つかの新しい活動が地元の公共機関や団体、市民グループの間から生まれている。そうした活動の牽引役を果たしたのが松阪歴史民俗資料館である。本論で詳しく述べるが、この資料館が行った活動は、過去をネットワークすることを通して現在を再ネットワークすることであったと言えるだろう。

本稿では、松阪歴史民俗資料館の主導のもと、「松阪縞もめん」をめぐる人、もの、装置、そして、過去、現在がどのように配置されて一つの歴史(一つの物語)が構成されたのか、また、そうした過去、現在にわたる人、もの、装置のコンフィギュレーション(配置・編成のあり方)がどのようにして「松阪縞もめん」の新しい歴史を創出しつつあるのかということを科学技術論的アプローチによって検討する。さらに、「松阪縞もめん」をめぐる人、もの、装置の配置・編成のあり方の具体的な分析を通して、活動に参加する人々の「エージェンシー」の構成と変化に見る学習の成果(outcome)、および、フィールド研究において学習というものをどのようにとらえることが可能かということについて考察する。

1. 社会・歴史的オブジェクトとしての「松阪縞もめん」

17 世紀に編纂された古百科事典には、木綿織物ならば「松坂嶋木綿」が上物(質のよいもの)だという記述がある。当時、品質の良さで評判の木綿織物を産出したのは松坂周辺の農家の女性たちであった。彼女たちは農作業の片手間に自宅の織り機で木綿を織り、それを商人に卸して手間賃(現金)を得ていたという。松坂地方は古代より織物と染色技術の伝統を持つところであった。織物の祖を奉る機殿神社や伝統的手法による藍染め工場などの存在が今日でもその名残を留めてい

る。また、松坂木綿織りの特徴である縞柄は、16世紀に松坂出身の商人によってベトナム辺りから持ち込まれた織物の柄（柳条模様）をモデルにしたものではないかと言われている。松坂の織り手たちはその縦縞模様を工夫し、洗練させていった。織り手は自分で織った布の端切れを反古紙に貼り、縞柄のサンプル帳（縞帳）を作った。江戸の織物商人は松坂の農家の織り手たちと縞柄のデザインについて交渉したという記述が残されている（川床 2012, 2013）。

豪商として知られる松坂商人たちは17世紀の末頃までに江戸の中心地に店舗をかまえた。松坂商人は反物がよく売れるように様々な工夫をこらした。例えば、値引きをするかわりに現金掛け売りなしの商売をする、反物を客の求めに応じて切り売りする、或いは、反物を着物に仕立てて売るなど、当時、購買力をつけてきた大衆を十分に引きつける商売の方法を編み出した。こうして、松坂縞木綿は江戸の庶民を中心に大きな人気を得たのである。当時、巷を賑わした“木綿を買うなら松坂の縞もめん”という合い言葉はこのような多重の社会・歴史的文脈のもとで作られたのである。松坂縞木綿は、17世紀に、木綿、藍、縞模様、松坂商人、新たに購買力をつけてきた江戸の顧客、そして、松坂地方の農家の織り手といった社会的かつ技術的な布置のもとで、社会・歴史的オブジェクトとして構成されたのである。

明治以降、国家的規模で推進された機械紡績の導入、および、綿と綿糸の輸入により、日本における木綿織りの社会・経済・文化的文脈は根底から壊され、1870年代に消滅する。松坂縞木綿も市場性を失い、忘れられていく。

しかし、1980年代に入り、松坂縞木綿を再評価する動きが地元松坂で起きる（写真1）。市場から姿を消して以来100年ぶりに、松坂縞木綿は、再び、多様な実践が交錯し、多様なテクストが生産され受容される社会的場を構成することになる。この動きを主導したのは「松坂歴史民俗資料館」である。資料館の館長であり、歴史研究家であった田畑美穂氏（1988）は松坂縞木綿の新たな歴史を作る上で重要な役割を演じ、かつ、社会・歴史的オブジェクトとしての「松坂縞木綿」を巡って登場する様々なアクターを再ネットワークするという役目を担うことになる。

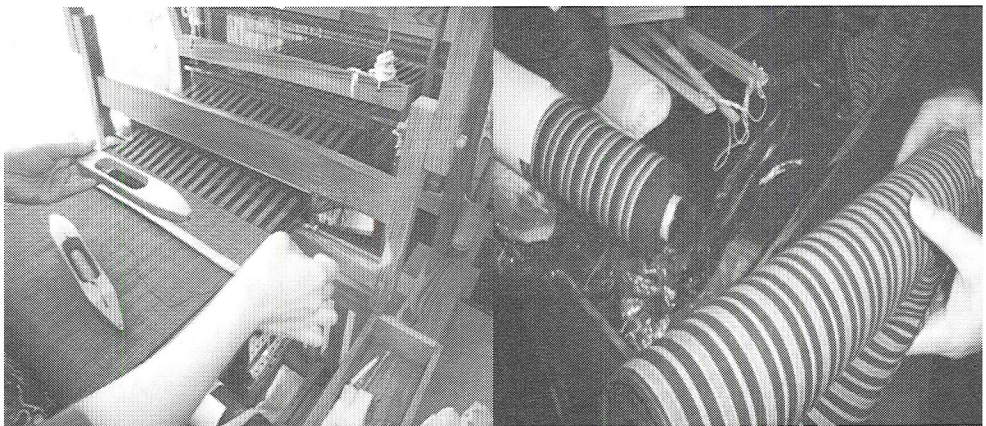


写真1. 手織りによる松坂縞木綿

尚、現在の松阪市が名称を‘坂’から‘阪’に変えた時点で、松坂縞木綿も松阪縞木綿へと変更された。

2. 「松阪歴史民俗資料館」を飛び出す‘松阪縞木綿’

田畑氏が「松阪歴史民俗資料館」の館長になって最初に手がけた仕事は「松坂縞木綿」を常設展示することであった。その準備として、田畑氏と松阪の歴史愛好家グループは木綿産業が16世紀のはじめにどのようにして松阪地方に出現したのかについて歴史家の話を聴く会を催し、織物や布に関するドキュメントや言い伝え、および、昔の織り機や農家の女性たちが布の端切れを集めて作ったといわれる縞帳などのアーティファクト（人工物）を蒐集した。また、彼らは大戦の前まで木綿を手織りしていたという老人を探し出し、昔ながらの手織り技術や木綿織りにまつわるエピソードを聞き取り調査した。さらに、彼らは松阪地方に伝わる染め物の歴史を研究し、現在の松阪に唯一残っている藍染め工場の存続をサポートした。こうした木綿の織りと染めに関する歴史的調査と共に資料館が力を入れたのは、江戸時代に松坂出身の商人がどのような商法を発達させ、いかにして松坂縞木綿を江戸の人々に売り込んだのか、そして、松坂縞木綿への高い評価をいかにして獲得することが出来たのかを調べ、展示することであった。

「松坂縞木綿」の展示は松阪市内外の人々の注目を集めた。館長の田畑氏は展示内容のさらなる充実を図ると共に、資料館が展示を通して構築した松坂縞木綿の歴史（物語）に登場するアクターやコミュニティの再現、言い換えれば、松坂縞木綿の歴史（物語）に準（なぞら）えうる現代の実践のコミュニティを組織することに力を注いだ。たとえば、江戸時代に実際に縞木綿を織って江戸の需要に応えた松坂の農家の女性になぞらえて組織されたのが、手織り技術の伝承活動をする女性の織り手グループ、ゆうづる会である。また、1870年代から松坂木綿の機械織り（写真2）と手染めによる藍染めを続けている工場と提携して松坂縞木綿を再び商品として市場に出すことを目的に活動するグループも作られた。こうして、比喩的に言うならば、「松坂縞木綿」は資料館の展示から飛び出し、松阪の過去と現在との間に新たな結びつきを創り出す社会・歴史的オブジェクトとして再構成されたのである。

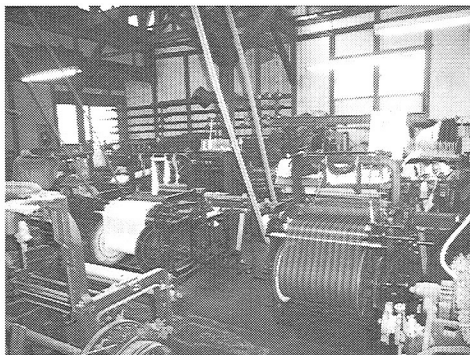


写真2. 機械織りによる松坂縞木綿

3. 過去をネットワークすることで一つの歴史(物語)を構成し、構成した歴史(物語)を用いて現在を再ネットワークする活動

イギリスの歴史家、E.H. カー(1962)は「歴史とは何か」の一節で、「歴史とは現在と過去との対話である」として次のように述べている：「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのであります」(p.40)。カーの歴史観を拡張すると、一つの歴史は一つの物語に対応するということができるのではないだろうか。ここでは、カーの見解を敷衍し、「一つのヒストリー(歴史)は一つのストーリー(物語)である」との観点から松阪歴史民俗資料館が行った活動を再吟味してみる。

松阪歴史民俗資料館は、松坂縞木綿を常設展示するに際して、過去の人、もの、装置をネットワークすることで一つの歴史(物語)をつくりだし、自ら構成した歴史(物語)を用いて現在を再ネットワークすることを試みている。松坂地方の農家の織り手たち、彼女たちが自ら織った布の端切れを集めて作った縞帳、松坂商人の江戸での商いと豪商への道筋といった17世紀の松坂木綿をめぐるアクター(人だけではなく人工物も含む)たちを、資料館は一つの物語に織り上げるというやり方で過去をネットワークし、松坂縞木綿の歴史を再構成している。さらに、資料館は自ら織り上げた歴史(物語)をもとに、社会・歴史的オブジェクトとしての松坂縞木綿をめぐる現在の実践のコミュニティを構築すべく、人、もの装置の再ネットワーク化を図っている。

現在の実践のコミュニティの一つとして構成されたのが女性による織り手グループ、「ゆうづる会」である。ゆうづる会の主要な活動目的は伝統的な手織り技術を保存し伝承することにある。しかし、活動の幅が広がるとともにゆうづる会では“織る技術を高めることと伝承活動との兼ね合いをどのようにはかったらよいのか”をめぐる議論が生じている。このことについては、後で詳しく述べる。

資料館による実践のコミュニティの再ネットワーク化の過程で興味深いのは、館長である田畑氏が松坂縞木綿の反物、および、縞木綿で作った小物を販売するコミュニティ((有)コットンライフと松坂もめん手織りセンター)をバックアップしていることである。田畑氏は「活用なくして保存なし」(1995)ということをよく口にする。先に見たように、資料館の展示では、松坂出身の商人の江戸での活躍が松坂縞木綿の歴史(物語)において重要な位置を占めている。言い換えれば、松坂縞木綿と松坂商人は切り離せない存在として構成されている。その意味で、松坂縞木綿の反物、および、それで作った小物を販売するコミュニティの存在(写真3)は、資料館にとって、松坂縞木綿をめぐる現在を再ネットワーク化し、活用と保存を担保する上で欠かせないアクターなのである。

近年、観光としての側面に松阪市のさらなる発展の可能性を探る松阪市役所は、松坂縞木綿をめぐる現在の実践のコミュニティの活動に関心を向けている。社会・歴史的オブジェクトとしての‘松坂縞木綿’をめぐる実践のコミュニティの社会的ネットワークが、新たな人、もの、装置を巻き込んで、新たな歴史(物語)を作り始めている。



写真3. 松阪縞木綿で作った小間物（ギフト）

4. 活動へのエージェンシーを形成する歴史的‘装置（仕掛け）’

松阪縞木綿をめぐる現在の実践のコミュニティの一つ、ゆうづる会の発足から現在までの活動を振り返ってみよう。ゆうづる会は今から35年前に活動を始めた。田畑氏が松阪歴史民俗資料館の館長に就任した1979年に、資料館は「松阪縞木綿の歴史と手織り技術の伝統」に関する講演会を開いた。松阪市とその周辺に住む80人以上の女性がその講演会に参加した。伝統的な手織り技術および松阪縞木綿への関心の高さがうかがえるできごとであった。翌年、松阪縞木綿の手織り技術の研修会が企画された。前年の講演会に参加した女性の中の17名が6ヶ月間の技術研修を受けるために参集した。この研修コースを終了した17名が松阪縞木綿の手織り技術の保存と伝承を主な活動目的として「ゆうづる会」を立ち上げたのである。2012年には発足30周年を記念して27名のメンバーによる作品展覧会が開かれた。現在は20代から80代までの22名によって会は運営されている。

ゆうづる会の活動については、川床（2012, 2013）に詳しく記述されている。ここでは詳述しないが、会の活動を現在に至るまで方向づけているのは、松阪歴史民俗資料館の館長、田畑氏が企画し、自身も講師として参加した初期の‘研修のあり方’である。研修生は、手織り技術の実習と平行して松阪縞木綿の歴史、特に、松坂商人と松坂木綿の深い関わりについて講義を受けた。実習と歴史の講義の合間にはフィールドワークを行った。たとえば、昔、手織りで布を織っていた女性（高齢者）を見つけ出して話を聞く、或いは、江戸時代に松坂地方の農家の女性が端切れを集めてサンプリ帳をつくったように、研修生は手分けをして昔の木綿を収集し、反古紙に端切れを貼り合わせて縞帳を作る。近隣に畑を借りて藍を栽培し、藍染めの体験をする等である。後にゆうづる会のメンバーになる研修生たちは、全研修コースを通じて、松阪縞木綿の歴史（物語）の再構成に参加していたとみることができる。言い方を換えれば、このような研修コースを設けて織り手の養成を企画した松阪民俗資料館は、後にゆうづる会を立ち上げるメンバーたちに、松阪縞木綿の歴史（物語）の再構成とそれを後の世代に伝える役割を託したということになるのかもしれない。

6ヶ月間の研修の後、研修生は一人一反の反物を織り上げ、これから始まる手織り技術の保存・伝承活動への参加の意気込みと覚悟を作文にしたため、織物と共に会に提出した。このプロセスを経て、研修生は正式にゆうづる会のメンバーになったのである。この30年間に新しい会員の募集は8回行われている。会員数が20名を下回りそうになったときに新規の募集がなされる。最近では30周年記念行事の前に8期生の募集があり、11名が約6ヶ月間の研修を受け、最終的に9名が正式に会員となった。その時の研修の内容と方法は35年前に第一期生が受けたものと基本的には殆ど同じものであったという。

現在、ゆうづる会は1期生から8期生まで、22人のメンバーで構成されている。年齢および松阪木綿との関わりの年数は異なるが、皆、松阪縞木綿を織ること、手織り技術を保存・伝承する担い手として活動することに懸命に取り組んでいる（写真4）。何が会員をこのような活動に向かわせているのだろうか。実際の活動場面における会員同士のやりとりのなかにそのことを探ってみる。

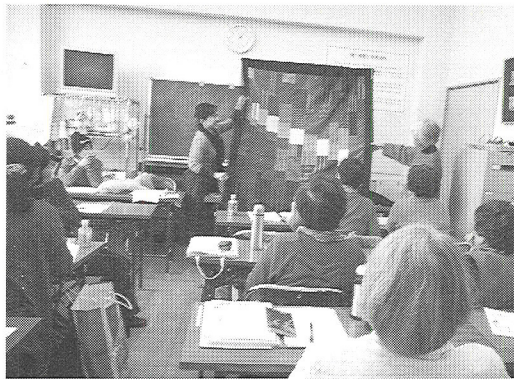


写真4. ゆうづる会の例会：作品展の展示物を検討している

ゆうづる工房には5台の織り機が設置されている。その内の3台を使って30周年記念イベントの作品が制作されている。2012年、4月の例会の後、会員は洋装グループと和装グループに別れてそれぞれの機の回りに集まり、反物の柄の最終的なデザインをどのようなにするか検討していた。そのときまでに各会員は自分の都合のよいときに工房に来て自分のデザインした柄を長さ20-30cmほど試作していた。それぞれの試作部分を眺めながら会員たちは色糸、柄、織り方について互いに批評し合っていた：

Kさん：これはあかん、これは化学染めや…

Lさん：こんな二番煎じしたらなあ…それにもっと上品じゃないと…

Mさん：ここは紺が少なすぎるんとちがうか？

Kさん：こんなに色糸使ったら私らのものじゃなくなるな…松阪木綿は藍の濃淡が基本やから…

Nさん：このへんで布がよれているのは足の踏み込みが足らんからじゃ

S さん：この柄はオーソドックスでええなあ…

M さん：ほやねえ、この柄は着物の裾あたりにもってくと栄えるかも…

K さん：前に聞いたことがあるんやけど、この細い柳条模様の織りが松阪縞
木綿の元（もと）らしいよ…

ゆうづる会では毎月例会を、そして、年に一度、4月に総会を開いている。200X年の総会に遅
刻して参加した会員に対して、あるベテラン会員が敢えて皆の前で遅刻について言及する：

K さん：ここは主婦の趣味やサークルとはちがう、手織り伝承のグループな
んやから、それだけの意識をもってやってもらわな困るよ！

Y さん：すみませーん！10時半からだと思い込んでいたもので…

議 長：これからは連絡をきちんとすることにして…

さて、議題にもどりましょう…これからイベントに向けて月4,5反は
出来上がってきます。4名どなたか入っていただいて、点検していた
だき…、点検も勉強になりますから

J さん：ひと（他人）のを見るのは大変やけど勉強になるよね

H さん：若い人にも少しやってもらったらどうやろ…A さん、どうですか？

A さん：私なんかまだまだひとさまのものを点検するなんて…

（ひとしきり、がやがやと私語が飛び交う）

M さん：そやけど、点検はええ勉強になりませ！

A さん：それでは、勉強させていただきます〜す！

“ただ、何かしたくて”参加した「主婦」にとって、織りの研修内容は技術的にも時間的にも物理
的にもかなりハードなものである。一年ほど前に研修を終えて正式な会員として活動している8期
生は研修を振り返って次のように言う：

T さん：糸の計算なんか、何が何だか分からないまま、一回目の全工程流し
のときは、ただただ、見よう見まねでやっていたような気がする

S さん：そう、3人とか4人だと飲み込みの早いひとが全部やってしまうか
ら…

4人だとただ見ているだけの人が必ずでてきてしまう

これからの研修では、一グループの人数は少ないほうがいいよね…

T さん：でも、ほんと、初めて全部自分で織ったときは、わあって、自分自
身に感動したなあ！…

S さん：私も、織り上がったときには、もう、ほんとに自分を褒めてやりたかつ

た！

研修生にとって、柄を決め（デザイン）、糸の計算をし、機（はた）をセットアップして布を織り、反物にするという作業を習得するのは相当困難なことであっただろう。それをやり遂げさせ、かつ、「松坂木綿の手織り伝承の担い手」としての一步を踏み出させたのは、折に触れ語られる松坂木綿の歴史と今も残されている「嶋帳」、それをめぐる数々の逸話だったのではないだろうか。それは研修生だけに言えることではなく、ベテラン会員にとっても、実習の合間に語られた田畑氏による松坂木綿の歴史や江戸時代の嶋帳と縞模様を織った農家の女性たちの話、松坂木綿と江戸時代の松坂商人の活躍等々の講義は大きな糧になっているという：

K さん：もともと織りが好きでやってたはずなのに、ときどき、自分が何のために織っているのかが分からなくなるときがあるんよ。そんなときは、よく江戸時代の嶋帳を見る…そうすると、また、やる気になるんよねえ…

M さん：亡くなった田畑先生が、ことある毎に、松坂木綿の歴史的な話をしてくれた。そのときはうんざりすることもあったけれど、今思うと、私たちが何のために織っているのかっていうことの基本を与えてくれていたんだなあーて…

ゆうづる会のメンバーによる以上のディスコース（やりとり）（川床 2012, 2013）からは、彼女たちの活動を構成している人、もの、装置の社会・技術的なコンフィギュレーション（配置・編成のあり方）が、手織り技術を習得して松坂縞木綿を織り、自分たちの手で松坂縞木綿を保存し伝承していくのだという強い志向（エージェンシー）の形成へと彼女たちを導いていることがわかる。具体的に言えば、「ゆうづる会」の存在そのもの、1期生から8期生までの世代の異なるメンバー、折に触れ語られる松坂縞木綿のあり方と織り手としてのコード（掟）、手織り技術の研修内容、松坂歴史民俗資料館、田畑館長の歴史講話、縞帳などの歴史的アーティファクト（人工物）の社会・技術的なコンフィギュレーション（配置・編成のあり方）がゆうづる会員のエージェンシー（存在のあり方）を形成している。さらに、メンバーの折々のやりとりで語られているように、ゆうづる会員の活動を取り巻く社会・技術的なアレンジメントの中でも、特に、資料館の田畑館長による歴史的な仕掛け（装置）が、ゆうづる会員としてのエージェンシー形成に大きなインパクトを与えていることが推察される。

5. 松阪縞木綿をめぐる社会・技術的アレンジメントの再編 (reconfiguration) と拡張・変形するエージェンシー

ゆうづる会のメンバーは、前章で見たような社会・技術的コンフィギュレーションのもと、松阪縞木綿を織ること、手織り技術を保存・伝承することへの志向性、或いは、‘こころのあり方’（可能性や希望、欲求）を形成させてきた。その‘こころのあり方’は、活動が続けるなかで、どのような広がりを持ち、形を変えているのだろうか。

尚、ここでいう‘こころのあり方’というのは、科学技術社会学の Callon, M. (2004) が用いる‘エージェンシー’という概念に依拠するものである。カロンはエージェンシーを人の存在のあり方、人が行為し、考え、様々な情動を経験しようとする能力や好み・志向性と規定している。エージェンシーは多様であり、かつ、可変的だ。人は、自らが置かれた場におけるひと（他人）、もの、装置の布置に依って、自主的、半自主的、受動的、情熱的、自立的、依存的などいかなうなかたち（form）でも存在し得る。カロン（前掲）は言う：「もしも、（今は自立的ではないと思っている）あなたが自立的な人間でありたいと思うならば、集団（共同体）を変えなさい、社会・技術的アレンジメントを変えなさい、そうすれば、あなたはエージェンシーを変えることになるだろう」（p.48）と。「エージェンシー」という概念のポイントは、人間の能力、志向性、性格等々は生来的なもの、固有のもの、不変的なものではなく、その人が置かれている環境の社会・技術的コンフィギュレーション（配置・編成のあり方）と深く関係して形成され変化し得るものだということである。

前にも少し触れたように、ゆうづる会では、最近、会としての活動の目的や方向性に関して意見のちがいが表面化している。ここでは、そのことをめぐる会員同士のディスコース（やりとり）のなかに、‘松阪縞木綿を織ること’、‘手織り技術の保存・伝承の担い手として活動すること’に対する会員の‘こころのあり方’、エージェンシー、および、エージェンシーの広がりと変化を探ってみる。

この数年、ゆうづる会の総会や例会で常に話題になり、そのことを通して会の活動の方向性をめぐる意見の相違が可視的になっている出来事がある。それは、小学校や他の公共施設から、綿くり、糸つむぎ、藍染めなどの実演講習の依頼がゆうづる会に頻繁に入るようになり、各会員の「織る」ことに向ける時間がそのために削られ、短くなっていることである。講習の依頼自体は松阪縞木綿を地域の子どもや大人によく知ってもらい、あるいは、松阪縞木綿の存在を伝承するという意味で、ゆうづる会の活動目的に添うものである。しかし、一方で、対外的な活動が余りに多くなると、織りの技術を高めることに向ける時間がすくなくなり、織ることに対するエネルギーも消耗するというジレンマがある。201X 年の例会では次のようなやりとりが繰り広げられた：

A さん：年の初めなので、少し希望を言ってもいいでしょうか？

織りという活動をもう少し中心に、それに時間をかけてするというこ

とは難しいのかなあと思うのですが…

- Bさん：そうそう、もっとたくさん織れば上手になるし…
- Aさん：このところ、織り以外の仕事を持ち込まれることが多くて…
もう少し織りを中心にしたいと思ってる人が多いんじゃないかと…
- Cさん：(織り以外の仕事を) もっと断ることも必要なんじゃない？
- Bさん：去年も一端断ることになった仕事をまたやることになったりして…
- Dさん：でも小学校からの依頼はちょっと断れないよねえ、
- Eさん：国語の教科書に糸つむぎが載ってるし…こどもたちの感想文がとってもかわいらしい…
- Gさん：それに藍を栽培してもらっているし…
- Dさん：私は小学校には行くべきだと思う…こどもたちも喜ぶし…
- Fさん：じゃあ、大人対象の〇〇館や図書館からの依頼は少し断ってもいいんじゃない？
- Eさん：んーん、まあ、その都度、行ける人がいたら引き受けてもいいんじゃないかなあ…
(がやがやとひとしきり私語がとびかう)
- Aさん：結局、こんな感じで、また元に戻っちゃうんだから…

「松阪縞木綿を伝承する」というスローガンを共有していてもどのような形で‘伝承’に携わるのか、あるいは、携わることができるのかということになると、各会員の時間・空間・人的事情や松阪縞木綿との関わりのヒストリーによって一様ではない。しかし、このやりとりで問題視された、‘織り’に割く時間が少ないこと、言い換えれば、‘織り’の技術を磨くための活動が少ないことへの懸念は、この5年余り、時折、会員によって語られてきたことである。あるベテラン会員はそのことと関連して、「古い世代の会員は殆ど専業主婦だけれど、新しい世代の会員はパートで仕事をしている人が多い。この人たちは織ること以外の対外的な活動、出張実演などのいわば松阪縞木綿の啓蒙活動には消極的であり参加したがる」と指摘する。一方、30代の新人会員(8期生)は「手織りの松阪木綿の反物が高い値段で売られているのを見ると、やっぱり、なんとなく羨ましくなりますねえ。自分ももっと技術をみがいて商品になるようなものが織れたらいいなあなんて思うことがあります…夢ですけど…」という。

201X年の総会では、織る時間を確保することに関するさらに突っ込んだやりとりがあった：

- Aさん：今年の活動計画を見ると、前年度と同じで、計画の中に各自必ず半年に一反は織りましょうといったものが入っていない…あれだけ皆でもっと織りに集中しようって話し合っていたのに…
- Bさん：そう、私もそれを感じました！ 私たち会員が織る反物の品質を上

げていこうって皆で話していたのに…それが全然反映されていない…

C さん：この計画案はそれとは逆の方向へ行っているよねえ、織り以外のこ
と（対外的活動）をこんなに入れて…ねえ？

A さん：ひょっとして、去年より増えているんじゃない？

このやりとりから見てとれることは、ゆうづる会員の間で、最近、織りの技術や織りの品質に関する問題意識が強くなってきているということである。その背景には、織り以外の活動への比重が高くなっているという事情もあるが、より根本的には、‘松阪縞木綿’をめぐる環境、即ち、社会・技術的コンフィギュレーション（配置・編成のあり方）が変わろうとしていることがある。松阪縞木綿’をめぐるこうした環境の変化は、主に、松阪縞木綿をブランド化し、それを松阪市の再開発に活用しようとする行政の動きによってもたらされている。

松阪市役所は「町なか再生プラン」を策定し、昨年あたりから、プランの実行へ動き始めている。プランの柱は松阪の歴史と観光を結びつけることにある。たとえば、松阪縞木綿と江戸時代の豪商・松坂商人、三井家など豪商の屋敷跡、そして、松坂商人を家系にもつ国学者、本居宣長と彼のゆかりの建物跡を結ぶ歴史物語の空間的再生とそれらに関連する商品（観光客の購買意欲を満たすみやげもの）の開発を急いでいる。市役所は、そのことで、ゆうづる会や松阪縞木綿で作った製品を販売する松阪もめん手織りセンター（有限会社コットンライフ、みいと織物業）など松阪縞木綿をめぐる実践のコミュニティに協力を求めている。松阪市の計画案では、既存の「松阪木綿振興会」という組織を軸に、その傘下に松阪木綿手織工房・ゆうづる会、コットンライフ（松阪もめん手織りセンター）、松阪木綿製織（みいと織物／松阪縞木綿の機械織り製造業者）を配置し、ゆうづる会には手織り技術と伝承活動、コットンライフには商品の管理・営業、みいと織物には商品の製造・管理の役割を与え、三者が連携して松阪木綿の振興にあたるという構想を描いている。

こうした動きのなかで、今年に入ってから、ゆうづる会員の織りの技術や織物の品質に関する問題意識に大きなインパクトを与える出来事があった。松阪市役所が構想する組織体、「松阪木綿振興会（案）」の商品管理と営業を担う部門であるコットンライフからゆうづる会に一つの提案がなされたのである。それは、松阪木綿の標章（エンブレム）を一本化すること、そして、反物の品質を検査する検品係を設けて、商品としての松阪木綿の質を確保するしくみを作ろうという提案である。標章の一本化と検品係の設置は、ともに、商品としての松阪木綿の品質の保持と保証に関わる事柄であり、「松阪木綿振興会（案）」が組織として松阪木綿の担い手であることを表明していくためには欠かせない手続きである。

この提案は、「松阪木綿振興会（案）」の商品の製造と品質管理を担う部門の S さんが、ゆうづる会の例会に参加してその内容を会員に説明した：例えば、会員の織った反物が商品として認められるためには検品係（検査担当者）による反物検査に合格しなければならないこと、検査者によって瑕疵（かし：きず・欠点）が見つけれられた場合はその反物の作者に手直しが依頼され、手直しの後、再検査されて合格の場合は商品として納品することができること、商品と認められた反物には

標章が付与されること、再検査の結果、商品として認められない場合、反物は作者に返品されること、その際、作者は検品料を支払わなければならないこと等々であった。

Sさんによる提案の説明の時に、Sさんと会員の間で次のようなやりとりがあった：

Sさん：M デパートでの特別展のとき、何もなくて（何の瑕疵もなく）通せるものは、ほんと、少なかったです。はっきり言って品質がよくないということです。

会 員：（皆、黙って聞いている）

Sさん：なぜ検品したいのかというと、松阪木綿がこれまでよりずっと注目されてきたということと、ゆうづる会に所属しないで木綿を織っているひとが何人かいますが、その人たちの織ったものを含めて、松阪木綿として一定の品質を保持するために必要だと考えたからです。そして、将来的には、水準に達している作品には同じエンブレムを与えられるようにしたいのです。

会員A：エンブレムって、あの特別展のときに付けたもののことですか？

Sさん：そうです。M デパートの特別展に出すときに決めたもの…、コットンライフのもののがよいだろうということで…

会員同士：あの時も、ゆうづるには何の話もなかったよねえ！？
（ひとしきり、会員同士の私語が飛び交う）

Sさん：さあ、検品に話を戻しますよお～、
特別展のときもそうでしたが…直したはずが直っていないということが度々ありました…。もう少し真剣に取り組んでほしいんです。

会員B：緯糸が目とじしているのは直せない…

会員C：30は直せるけど、40は直せない…

Sさん：傷が一つ、二つで、売り値が何万も違うんですよ。一目、一目、一時間かけてもよいはず…そのくらいの気持ちで直してほしいんです！

このようなやりとりがあった翌月の例会では、反物検査に関する幾つかの取り決め、例えば、検品の流れ、検査料、検品係への報酬、検査の基準等々についての覚書がSさんから提示された。覚書の中身を見ると、検査基準の項目では、経糸の総本数880本、反物の丈14m、幅39cm以上、緯糸の打ち込み10m当り19本など形式上の基準が示されている他に、‘緯糸のループ、織りむら、経糸のゆるみ’など、織る技術と密接に関係する事柄も検査結果の合否の判断材料にするという添え書きがあった。反物検査はあくまで反物（写真1）として販売しようとするものに対してなされるのであり、個人使用のものやみやげものなどの加工に使用するものは含まれていない。いずれに

せよ、ゆうづる会は発足以来、初めて、織りの技術に対する評価を反物検査とエンブレムの付与という形で外部から受けることになったのである。

先の総会でのやりとりで、会員は、口々に、‘もっと織る活動に時間をとりたい’ ‘もっとたくさん織れば上手になる’ ‘各自必ず半年に一反は織るという目標を持つ’ ‘織りに集中して、反物の質をあげていこう’ と語っている。会員たちは、品質の高い、商品として売ることのできる反物を織る技術を獲得したいというエージェンシーを形成させている。松阪市の「まちなか再生プラン」(2013)のもとで進行する松阪木綿をめぐる実践のコミュニティの再編と統合、そして、それまでは存在しなかったコード（掟）を含む装置（「松阪木綿振興会」、商品としての松阪木綿）やアーティファクト（反物検査、検品係、検査基準）の出現、つまり、松阪縞木綿を取り巻く人、モノ、装置の社会・技術的アレンジメント（布置）の変化と再編が、ゆうづる会員に‘織りの技術を高めたい’というエージェンシーの形成を促進させているのである。

先に見た会員同士のディスコースでは、伝承活動に時間がとられて織りの技術を磨くための活動が少ないという不満が語られていた。当事者以外の者からすると、会員の間に“技術か伝承か”をめぐる意見の対立が存在するかのように聞こえる。しかし、実際には技術と伝承の二項対立が存在するわけではない。むしろ、会員たちが30年におよぶ活動を通して育ててきた‘手織り技術の保存・伝承の担い手でありたい’というエージェンシーが拡張、変化していると見るべきであろう。松阪木綿を取り巻く環境が変化しつつある今、彼女たちのエージェンシーは、‘手織り技術を商品として通用するほどに高めて、その技術を保存・伝承したい’というものに変形しつつある。これは、会員たちの活動の対象（オブジェクト）である松阪縞木綿を取り巻く人、モノ、装置の社会・技術的アレンジメント（布置）が変化すると共に、「ゆうづる会」を取り巻く社会・技術的コンフィギュレーションも変わりつつあることによるものと考えられる。

6. おわりに：エージェンシーの形成と変化にみる学習の成果

ゆうづる会の発足以来、会員たちは、一端、歴史の舞台から消えた松阪縞木綿の手織り技術を自分たちの手で復元し、保存・伝承を担っていかうとするエージェンシーを活動と共に育んできた。このようなエージェンシーは単に個人の内発的動機づけのようなもので形成されるのではない。‘6ヶ月間の研修で松阪縞木綿の手織り技術をマスターし、反物を織ることができるようになる’、‘5年ごとに開く作品展に会員の一人として反物を織り、出品する’ ‘自分たちで育てた天然藍をつかって糸を染色し、松阪縞木綿を織る’等々の活動を可能にする人、もの、装置の社会・技術的アレンジメント（布置）のもとで、人、もの、装置と相互交渉（inter-action）しつつ、エージェンシーは集合的（collective）に形成されるのである。松阪歴史民俗資料館と田畑館長の強い意向を背景に発足した「ゆうづる会」の存在、1期生から8期生までの世代の異なるメンバー、折に触れ語られる松阪縞木綿のあり方と織り手としてのコード（掟）、手織り技術の研修内容、松阪歴史民俗資料館、田畑館長の歴史講話、縞帳など歴史的アーティファクト（人工物）等々、人、もの、装置の

社会・技術的コンフィギュレーション（配置・編成のあり方）のもとで、活動を通して、自分たちの手で松阪縞木綿を保存し伝承していこうとする彼女たちの強い志向性（エージェンシー）は形成されているのである。

活動理論のユーリア・エンゲストロムら（Engestrom, Y. et al. 2014）は、幾つかの仕事場において職場の環境や生産性の‘改善’を諮る介入実験（change laboratory という方法を用いる）を行い、働く人々のエージェンシーの形成と変化を見ようとしている。エンゲストロム（Engestrom, Y. 2007）はエージェンシーを変化への欲求（意志のある探求）と規定する。エンゲストロムらは、介入実験の結果から、改善の過程では働く人々の間に、事態の変化に寄与する6つのタイプのエージェンシーが行為（アクション）の変化と共に現れるとして、次のように述べている：人々は、はじめ、介入者（エンゲストロムら研究者）の提案するイノベーション（変化）への取り組みに対して抵抗を示すが、ミーティング（change laboratory）を繰り返すうちに、自らの活動の現状を批判的に見るようになる。やがて、変化の可能性を探り、その展開をめざして活動の新しいモデルを構想する。そして、人々は連携して変化のための具体的なアクションに参加し、そのアクションの成果を見ながら、目標とする職場の活動の変化（改善）をめざして継続的なアクションをとるようになる。エンゲストロムは、このような活動の変化を可能にするエージェンシーは個人というよりも集合的（collective）に形作られるものであり、6つのタイプのエージェンシーに導かれたアクションの進化はそれ自体学習のプロセスであると述べている。

筆者はエンゲストロムらの「介入実験」に対して基本的に批判的な見解を持っている。しかし、行為（アクション）の変化を希求するエージェンシー、アクションを変えようとするエージェンシーが活動（activity）を通して集合的に形成されるというエンゲストロムらの主張、および、エージェンシー形成のプロセスそのものが学習のプロセスなのだという彼らの見解には首肯すべき点があると考ええる。但し、エンゲストロムらが‘集合的’と言うとき、その集合の中身は‘人と人’だけであり、‘モノや装置’は含まれない。言い換えれば、エンゲストロムらの視野には活動対象をめぐる人、もの、装置の社会・技術的アレンジメント（布置）がどのようなものであり、それらとの相互作用によってどのようなエージェンシーが形成されるのかといった視点はないことに注意しなければならない。

ゆうづる会員の活動を通したエージェンシーの形成・拡張・変化の過程は、これまで見てきた通り、まさに、学習のプロセスであり、形成されたエージェンシーは学習の成果（outcome）ということができるであろう。活動の対象（オブジェクト）である松阪縞木綿をめぐる人、もの、装置の社会・技術的アレンジメントの下で、それぞれの要素（アクター）との相互交渉を通した活動によって、‘手織り技術の保存・伝承の担い手でありたい’或いは、‘商品として通用するほどに織る技術を高めたい’というエージェンシーが集合的に形成されていくこと自体、学習のプロセスと見ることができる。活動の対象をめぐる社会・技術的アレンジメントの変化とともに既に形成されているエージェンシーが拡張されて、‘手織り技術をさらに高めて、その技術とともに松阪縞木綿を保存・伝承していきたい’というエージェンシーに形を変えることも、また、学習の成果と見ることがで

きるだろう。

参考文献

- Callon, M. 2004 The role of hybrid communities and socio-technical arrangements in the participatory design. 武蔵工業大学環境情報学部 情報メディアセンタージャーナル 第5号 pp.3-10.
- Engestrom, Y. 2007 “Agency in Activity Theory.” Paper presented at the third Conference on Cultural and Activity Research (FISCAR’7), Transforming Objects of Social Practices within Global Networks, Helsinki, Finland, September 27-28.
- Engestrom, Y., Sannino, A., and Virkkunen, J. 2014 On the Methodological Demands of Formative Interventions. Mind, Culture, and Activity, 21:118-128.
- E・H・カー 清水幾太郎訳 1962 歴史とは何か 岩波書店
- 川床靖子 2012 メディアとしての「松阪縞木綿」：社会・歴史的実践の紡ぎ合う場の創出 大東文化大学紀要 第50号 pp.183-201.
- 川床靖子 2013 空間のエスノグラフィー 文化を横断する 春風社
- 松阪市 2013 松阪まちなか再生プラン〈活動報告書 平成22-24年度 総集編〉
- 田畑美穂 1998 松阪もめん覚え書 中日新聞本社
- 田畑美穂 1995 文化的遺産の掘り起こしと活用 地域づくり 95年6月号